

唐代軍礼における「献俘礼」の基本構造

王 博

はじめに

中国前近代の王朝は、「法」と「礼」を二大支柱としてその国家運営がなされてきたといつてよいであろう。このうち、法については今日までに膨大な研究蓄積があるが、一方の礼に関する研究はそれと比較すると研究の蓄積は浅く、一九九〇年代から本格的に分析が進められたといつてよい。

中国の礼は、『儀礼』『周礼』『礼記』の三礼をもとに、特に儀式次第については『儀礼』に依拠して漢・魏・晋・南北朝期に整理発展をとげ、それらは唐礼に結実した。そして、唐では『貞観礼』『顯慶礼』を経て、『大唐開元礼』

一三〇巻に集大成された。儀式書としては、『儀礼』以降はこの『大唐開元礼』が現存する最古のものである（以後『開元礼』と略称）。

『開元礼』は、伝統的な五礼制度に基づいて編纂された。五礼とは、吉礼（祭祀の礼）、賓礼（外国賓客接待の礼）、軍礼（出征、田獵など軍事の礼）、嘉礼（冠婚・賓射などの礼）、凶礼（死喪・凶荒の礼）を指す。これらは、抽象的な「礼」の概念を制度化したもので、国家を統治する規範であり、かつ理想的な社会環境を整備しようとしたものである。このうち、皇帝権力構造の分析に関わるものとして、唐の吉礼・賓礼・嘉礼・凶礼についてはこれまでもしばしば取り上げられてきた。それに対して、軍礼の研究はさほど重視されず、未解明な部分も多く残されている。¹⁾

いうまでもなく、軍事は王朝運営と統治者権力の維持において最も重要な要素の一つである。それに関わる軍礼は、軍事的性格を示す一連の儀式として、皇帝と天地等の諸神との関係だけではなく、実際に軍事に携わる軍将の要素も加味され、その点が他の四礼とは異なる特別な側面を有すると思われる。つまり軍礼の研究は、それらのいわば三位一体的な関係を明らかにすることとなり、そしてそれは中国史上における皇帝権力と国家体制のあり方を研究する上で、避けては通れない一分野であるときえいつてよい。

ただし、一言で「軍礼」とはいつても、唐の軍礼はそれなりに壮大な体系をもって構築されている。そこで本稿では、唐の軍礼の重要な一側面である「献俘礼」（俘虜や戦利品を捧げる儀式）を対象に取り上げ、その基本的な構造を考察してみた^②。

献俘礼の初期段階について、先学の研究によって殷の献俘礼は戦争の勝利に対して功労と祝賀を表そうとする宗教的習俗に由来することが既に明らかにされた。戦争の勝利を、人々は諸神と先祖の加護によるものと認識し、その返礼として盛大に献俘の儀式を開き、戦利品を慎ましく諸神に奉げ、感謝の気持ちを示さねばならなかつた^③。以後の歴代王朝が献俘礼を実施したことも史料から確認できる。周知のごとく、礼制度は漢代から政治を運営する道具として

利用され、時代の経過にとともに変容してきた。それならば、強大な皇帝権力と強力な軍事力を有したとされる唐王朝においては、献俘礼はどのような構造をもっていたのであろうか。

一 唐代献俘礼の多重構造化

—特に「造」と「告」について—

唐代の献俘礼を検討するに当たって、まず一つの問題を確認しておきたい。それは「献俘」と「献捷」の区別である。両者は類似する性格を有するが、次の点が大きく異なっている。すなわち、「献捷」は戦争勝利の報告で、戦勝規模の大小に関係なく中央政府に報告する。一方、「献俘」は戦争勝利を報告する行為を伴うが、それと同時に（あるいはその後）地方政府または前線にいる将軍は俘虜を送り届けねばならない。中央政府は、それを迎える儀式を開くことがあり、しかもこの儀式は単一なものではなく、一連の連続する儀式で構成される複合体である。つまり、「献俘」儀式は「献捷」の場合よりも規模が大きく、内容も複雑なのである。それでは、唐代の献俘礼はどのような構造を持っていたのか、この献俘の過程を通して政府は何を意図したのかを見てみよう。

唐王朝が献俘礼を規定した文字資料として、『開元礼』に記される献俘礼に関する内容をあげてみよう。それらは『開元礼』軍礼の出征に関するいくつかの儀式の文末に散見し、次のとおりである。⁽⁴⁾

a 皇帝親征造於太廟（卷八三）

凱旋告日、陳俘馘於南門外、北面西上、軍實陳於後。其告奠之禮皆與告禮同。

b 制遣大將出征有司宜於太社（卷八七）

若凱旋、唯陳俘馘及軍實於北門之外、南面、其告禮如上儀、祝版燔於齋所。

c 制遣大將出征有司告於太廟（卷八九）

若凱旋、惟陳俘馘及軍實於南門之外、北面西上。其告禮如常儀。

右からうかがえるように、唐代献俘礼は「皇帝親征」と「制遣大將出征」の二つの場合に分かれている。「皇帝親征」の場合、皇帝は出発する前にまず園丘・太社・太廟で「告奠之禮」を行い、「制遣大將出征」の場合、大將は出発する前に太社・太廟・齊太公廟で告礼を行う。⁽⁵⁾ aの「其告奠之禮皆與告禮同」とb・cの「其告禮如上（常）儀」が示すように、献俘礼の内容は、出征する際に行われる告礼に準ずるのであるが、献俘礼では門外（太廟は南門、太社は北門）で実際に「俘馘」を陳列する点が異なっている。

る。

ところで、右では社稷・祖靈に対して「告」が行われるが、注目すべきは儀式に用いられる「造」「宜」「告」の使い方の差異である。⁽⁶⁾ これは儀式内容と緊密に関係するので、あらかじめ説明しておきたい。今、『開元礼』篇目に列挙される諸儀式名の中から太廟と太社で行う儀式を取り上げて整理すると、表1のごとくになる。

まず太廟における諸儀式の式次第を『開元礼』に見てみると、それらでは皇帝が親祭するか否かに関係なく、各儀式画面の性格と目的によって、儀式行為に用いる呼称が異なることがうかがえる。それらを整理すると、平時に実施する吉礼では「享・薦新・祭・告・祈」が行われ、戦時の際に行う軍礼では皇帝は「造」礼、大將は「告」礼を行う。

一方、太社の諸儀式では、平時に開く吉礼では「祭・告・祈」を、軍礼では皇帝も大將も同じく「宜」を用いる。すなわち、①『開元礼』の諸儀式において「造・宜」は軍礼に専属する用語であること、②軍礼の中では「造・告」が区別されていること、の二点がまず知られるのである。

『周礼』春官宗伯・大祝条に、

大師、宜於社、造於祖。

表1

	太廟	太社
吉 礼	皇帝時享於太廟（卷三七）	皇帝仲春仲秋上戊祭太社（卷三三）
	時享於太廟有司攝事（卷三八）	仲春仲秋上戊祭太社有司攝事（卷三四）
	皇帝禘享於太廟（卷三九）	皇帝巡狩告於太社（卷五八）
	禘享於太廟有司攝事（卷四〇）	巡狩告於太社有司攝事（卷五九）
	皇帝禘享於太廟（卷四一）	時早祈於太社（卷六五）
	禘享於太廟有司攝事（卷四二）	諸州祭社稷（卷六八）
	薦新於太廟（卷五一）	諸州祈社稷（卷七〇）
	季夏祭中霤於太廟（卷五一）	諸縣祭社稷（卷七一）
	皇帝巡狩告於太廟（卷六〇）	諸裏祭社稷（卷七一）
軍 礼	巡狩告於太廟有司攝事（卷六一）	諸縣祈社稷（卷七三）
	時早祈於太廟（卷六五）	
	皇帝親征造於太廟（卷八三）	皇帝親征宜於太社（卷八二）
	制遣大將出征有司告於太廟（卷八九）	制遣大將出征有司宜於太社（卷八七）

唐代軍礼における「献俘礼」の基本構造

とあり、『礼記』王制篇には、

天子將出、類乎上帝、宜乎社、造乎禴。諸侯將出、宜乎社、造乎禴。

とある。これに対して、鄭玄は「類、宜、造、皆祭名、其禮亡」と注し、また孔穎達は「造乎禴者、造、至也、謂至父祖之廟也」と注する。さらに正義は、

造乎禴者、造、至也。謂至父祖之廟也。…（中略）…。廟為親近、故以奉至言之、各隨義立名也。

と解釈する。つまり、唐の治国理念と制度が三礼、特に『周礼』を模倣したように、上述の「造」と「告」も三礼に依拠している。右の史料から、「造」は、①軍礼に専属する用語であること、②天子あるいは諸侯が父廟（あるいは祖廟）に対して用いる用語であること、の二つの特徴がうかがえよう。おそらく、唐の軍礼においては、太廟と血縁関係のある皇帝と区別するため、大將が太廟に対する告礼に「告」を用いたと思われる。

『隋書』卷八、礼儀志三には、

古者天子征伐、則宜於社、造於祖、類於上帝。還亦以牲遍告。梁天監初、陸璣議定軍禮、遵其制。帝曰、「宜者請征討之宜、造者稟謀於廟、類者奉天時以明伐、並明不敢自專。陳幣承命可也」。璣不能對。

とある。この記事は、南朝・梁の天監年間（五〇二〜五一

九)に軍礼を制定した際の武帝と陸璣の会話である。⁽⁸⁾武帝は、「宜」は太社に征討の方法と専断の権力とを、また「造」は太廟の先帝たちに軍事策略を求める手段であり、幣を奉げることによって「命」(社稷諸神と先祖の加護)を得る儀礼であると認識している。

二 唐代献俘礼の実例

『開元礼』によれば、そもそも唐の献俘礼は、戰場から凱旋した時に太社と太廟それぞれで告礼を行う儀礼である。太社と太廟で行うのは、国家が諸神から戦争勝利の加護を受けていることを表象し、それによって政権の正当性を強調する役割を果たすからである。しかし、史書に見える唐代の献俘礼には、それ以外の意味を示す事例も見受けられる。

『唐会要』卷一四、献俘の条には、第三代高宗朝初期に西突厥・阿史那賀魯の乱を平定した際のこととして、次のように記される。

顯慶三年十一月。蘇定方俘賀魯到京師。上謂侍臣曰、「賀魯背恩。今欲先獻俘於昭陵。可乎」。許敬宗對曰、「古者出師凱還、則飲至策勳於廟。若諸侯以王命討不庭、亦獻俘于天子。近代將軍征伐克捷、亦用斯禮。未

聞獻俘於陵所也。伏以園陵嚴敬、義同清廟。陛下孝思所發、在禮無違亦可行也」。十五日、還獻於昭陵。十七日、告於太廟。

阿史那賀魯は啞利失可汗の甥であり、太宗の貞觀二二年(六四八)に部落を率いて唐に内附した。賀魯は太宗が派遣した龜茲討伐では昆丘道行軍總管に任命され、龜茲平定の功績によって安西都護府下の瑤池都督となった。龜茲遠征に出発する際に、太宗は嘉寿殿に賀魯を招き、自分の上着を彼に羽織らせたほどであった。ところが、太宗が崩御すると間もなく賀魯は沙鉢羅可汗として自立し、唐に反旗を翻したのであるが、⁽⁹⁾顯慶三年(六五八)に至って伊麗道行軍大總管の蘇定方に敗れ、長安に護送された。こうした事情を背景にして、右の会話があったのである。

高宗は、俘虜の賀魯を太宗の昭陵に献俘しようとして、礼部尚書の許敬宗に確認した。それに対して許敬宗は、陵墓の「義」は宗廟と同じように「嚴敬」であり、先帝に対して孝を表明する行為は礼に反していないことを理由に、肯定したという。高宗の意図は、恩に背反した賀魯を昭陵に献じ、同時に孝を表すことにあつたと思われる。逆にいえば、献俘礼は祖霊に対して行うのが本来の姿であつたことがうかがえる。つまり、それはあくまでも実在しない諸神に対する観念的な行為であり、象徴的な意義をもつもの

として理解すべきであろう。実際に、昭陵での献俘の二日後に、太廟での告が執行されている。

同じく『唐会要』献俘条には、

(元和)十二年十一月、隋唐節度使李愬、平淮西、擒逆賊吳元濟以獻。上禦興安門、大陳甲士旌旗於樓南。文武群臣、皇親、諸幕使人、皆列位。元濟既獻於太廟・太社、露布引之、令武士執曳樓南。攝刑部尚書王播奏、請付所司。制曰「可」。大理卿受之以出。斬於子城之西南隅。

とある。憲宗の元和一二年(八一八)に、淮西地域の吳元濟の反乱を平定した際のことであるが、太廟・太社での献俘礼を執り行った後、憲宗は興安楼に上り、文武百官・皇室も位に着き、俘虜の吳元濟は露布の引導で興安楼の南に引き立てられた。そこで、攝刑部尚書の王播は吳元濟を大理寺卿に付するよう上奏し、憲宗から許可の勅が出ると、吳元濟は子城の西南で斬首されたという。この記事からもわかるように、太廟・太社に献俘礼を終えてから、さらに皇帝に対して献俘礼を実施し、その上で俘虜の処置について皇帝本人の裁可を仰ぐこともあった。

俘虜が皇帝の前に引き立てられることは、例は少ないが唐の前半期にも見える。『唐会要』同条に、

顯慶五年正月、左驍衛大將軍蘇定方、討思結闕俟斤都

唐代軍礼における「献俘礼」の基本構造

曼、獻俘於東都。上禦乾陽殿、定方操都曼等以獻。法司請斬之。定方請曰、「都曼反叛、罪合誅夷。臣欲生致闕廷、與之有約、述陛下好生之德、必當待以不死。今既面縛待罪。臣望與其餘命」。上曰、「朕屈法申恩。全卿信誓」。乃宥之。

とあるのは、その例である。高宗の顯慶五年(六六〇)に、唐に背反した鉄勒の思結闕俟斤都曼が捕らえられ、高宗が御する洛陽の乾陽殿に連行された時の状況を伝えた記事である。反は十悪にあたるので刑部は大辟罪で斬刑の判決を下そうとしたが、大將軍の蘇定方は戦場で都曼を生け捕るために彼に死刑の判決が下らないことを約束していたので、高宗に赦免を求めた。蘇定方の信用を保全するため、高宗は特別に都曼を赦免したという。

また、『旧唐書』卷二二四、李正己伝附、李師道伝には、擒師道而斬其首、送於魏博軍、元和十四年二月也。是月、弘正獻於京師。天子命左右、軍如受餞儀、先獻於太廟・郊社。憲宗禦興安門受之、百僚稱賀。

と見える。憲宗朝の記事であるが、斬首された李師道の首級が京に届けられ、通常の太廟と太社のほか、憲宗が御する興安楼において献俘礼が実施されている。一連の儀式的終了にあたって、憲宗は百官から祝賀を受けたことを伝える。

以上はいずれも、相当に大きな征役や反乱討伐の献俘礼の事例である。皇帝が御する楼（または殿）に献俘する行為は、次の機能をともなっていると考えられる。すなわち、①俘虜は皇帝の前に連行されて皇帝から判決が下されること、②それは皇帝が合法的に生殺を決する権力を有する絶対的な至高者であることを来場者全員に認識させること、③一連の献俘礼の収束として百官から祝賀を受け、君臣の共楽を表現すること、である。場合によっては、投降した俘虜を赦免して任官することもあった（『唐会要』巻一四、献俘）。穴澤彰子氏が指摘されたように、唐代皇帝は楼の構造（楼の上・下）を生かして君臣関係の差別を確認させる効果を利用するが、献俘礼の場合も同様である。

また、妹尾達彦氏が指摘されるように、唐の南郊祭祀儀礼は、玄宗朝になると「太清宫↓太廟↓南郊」という祭祀順序の形式が確立し、その影響で天宝年間以降は太清宫も献俘礼の会場に編入されるようになる。史料上、献俘礼を太清宫で行った最初の事例は、玄宗天宝五年（七四六）のことである¹¹。唐後半期の献俘礼で、太清宫は大きな地位を占めた。

さらには、圓丘で実施した一例であるが、『資治通鑑』卷二〇一、総章元年（六六八）一〇月条に、

李勣將至、上命先以高藏等獻于昭陵、具軍容、奏凱

歌、入京師、獻于太廟。十二月、丁巳、上受俘于含元殿。…中略…丁卯、上祀南郊、告平高麗、以李勣為亞獻。己巳、謁太廟。

とある。これは、高宗の高句麗討伐後の例であるが、唐の高句麗遠征は太宗期に大規模な進攻を実施して失敗し、ここに至ってようやく征役に終止符を打ったので、高宗は圓丘においても告礼を実施し、功を立てた李勣に亞獻（第二番目に酌献をする担当者）を担当させた。儀式に俘虜を昊天上帝に奉げる内容があるかどうかは確認できないが、儀式の目的は「告平高麗」であり、また、戦役の司令官の李勣も酌献を担当していることから献俘礼の一部として実施したと見てよいであろう。また、肅宗の至徳二年（七五七）に、安史の乱で喪失した西京長安が元帥・廣平王によつて回復されると、その捷書が上皇（玄宗）の滞在する蜀に届き、上皇は宰相の裴冕を遣わして圓丘・太廟・太社において告礼を実施させている¹²。

以上、唐代献俘礼の実例のいくつかを史書に見てきた。それらを大別すれば、太廟・太社・陵墓・太清宫（玄宗朝以降）で実施される象徴的な献俘告礼と、皇帝本人に対して行われる実用的な献俘礼の二種になる。それに加えて、極めて大規模な征役においては圓丘で行われることもあった。ただし、陵墓や圓丘の例は個別的なものであり、

太清宮も本来の形式のいわばバリエーションと云ってよいであろう。また、楼（殿）に御する皇帝に対して実施される献俘礼は、実際には慣例的に執り行われ、それが後世に影響を与えたことは認められるであろうが、唐王朝の滅亡まで正式な規定とはならなかった。唐代の献俘礼は、あくまでも太廟と太社で行われるのが常態であり、本来の形であった。

それならば、太廟・太社での献俘礼はどのように執り行われたのであろうか。

三 太廟での献俘礼の式次第

まず、献俘礼の常態ともいべき太廟における儀式の式次第を整理してみたい。ここで太廟を取り上げるのは、太社における儀式の場合も、基本的な手順は太廟と同じだからである。上述のように、太廟での献俘礼は、皇帝親征の場合の「造」礼と大将出征の場合の「告」礼とに分けられる（ただし、資料 a、b、c のように、『開元礼』では両者を「告礼」また「告奠之礼」と呼称し、両者を「告礼」と総称する場合もある）。そこで、この両者について『開元礼』に規定される式次第を整理して、比較してみよう。¹³

「告礼」は祭祀全般にわたって行われるもので、献俘礼

もそれに準拠しているので、まず唐代の吉礼における「告礼」の流れを述べておく。『新唐書』卷一一、礼樂志一に、凡祭祀之節有六。一曰卜日、二曰齋戒、三曰陳設、四曰省牲器、五曰奠玉帛、宗廟之晨裸、六曰進熟、饋食。とある。この六段階は、すなわち、儀式実施日を決定する占い、儀式前の齋戒（もの忌み）、その間に有司が行う位や道具などの会場設定の準備段階（一〜四）と、儀式当日の玉帛の奠獻（宗廟の場合は晨裸）、食事の供用（五・六）からなる。唐代の礼制は大・中・小の三ランクに分けられ、¹⁴太廟の祭祀は大祀に相当する。

『開元礼』記載の献俘礼記事は長文なので、説明に支障のない範囲でできるだけその内容を要約して整理すれば、表2のごとくになる。¹⁵さらに、儀式会場を可視化して理解に供すれば、図1のごとくである。¹⁶『開元礼』の編纂された玄宗朝の廟制は、獻祖から皇考睿宗までの合計九廟であった。

さて式次第を確認してみると、まず皇帝「造」礼の内容は、準備段階、晨裸、饋食、儀式終了の四段階で構成されている。皇帝は来場すると、まず九廟に晨裸する。饋食段階では、皇帝は順番に九廟の神主に醴齊を酌献する。その間に太祝による祝文の読み上げが行われる。皇帝が東序に至ると、太祝は各室の上尊から福酒を少しずつ汲んでそれ

表2

		皇帝親征造於太廟 (卷八三)	
準備	占日↓齋戒↓次と版位等の設置↓犠牲と器の点検	準備	制遣大將出征有司告於太廟 (卷八九)
晨裸	皇帝は獻祖の尊彝で鬱酒を酌する (肅和之樂)、皇帝は獻祖の室に入り、獻祖神主に面して鬱酒を以つて地に晨裸↓皇帝が退室し、再拜↓皇帝は懿祖、太祖、代祖、高祖、太宗、高宗、中宗、睿宗に晨裸↓皇帝は位に戻る。	奠玉帛	告官は幣を以つて獻祖の室に入り、獻祖神主に玉帛を奠獻する↓告官は退室し、再拜↓告官は太祖、代祖、高祖、太宗、高宗、中宗、睿宗の室に玉帛を奠獻。
饋食	皇帝は獻祖の尊彝で醴齊を酌する (壽和之樂)、皇帝は獻祖室に入り、爵を以つて獻祖神主に奉げる (酌獻) ↓皇帝は退室し、太祝は室外に祝文を読み上げる ↓皇帝は再拜し、また再拜↓皇帝は懿祖、太祖、代祖、高祖、太宗、高宗、中宗、睿宗に (酌獻) ↓皇帝は東序に行き (西向きに立つ) ↓諸太祝は上樽の福酒を一つの爵に注ぎ合わせる ↓皇帝は酒で祭り、酒を飲み、爵を奠く ↓太祝は各神主前の胙肉と黍稷飯を籩に載せる ↓皇帝は胙肉と飯を食べる ↓皇帝は酒を飲み干して位に戻る ↓軍將は皇考睿宗大聖真皇帝の室の外に立つ ↓軍將は再拜して福酒を受ける ↓軍將は酒で祭り、酒を飲み、爵を奠く ↓軍將は位に戻る ↓胙肉を百官 (軍將) に下賜。	進熟	告官は獻祖の尊彝で醴齊を酌して獻祖の室に入り、爵を以つて獻祖神主に奉げる (酌獻) ↓告官は退室して太祝は室外に祝文を読み上げる ↓告官は懿祖、太祖、代祖、高祖、太宗、高宗、中宗、睿宗に酌獻 ↓告官は東序に行き (西向きに立つ) ↓諸太祝は各室の福酒を一つの爵に注ぎ合わせる ↓告官は酒で祭り、酒を飲み、爵を奠く ↓太祝は各神主前の胙肉を告官に進める ↓告官は胙肉を食べる ↓告官は酒を飲み干して位に戻る ↓諸將は皇考睿宗大聖真皇帝の室外に立つ ↓諸將は再拜して福酒を受ける ↓諸將は酒で祭り、酒を飲み、爵を奠く ↓太祝は胙肉を諸將に授け、諸將は再拜して福酒を飲み干し、位に戻る ↓胙肉を百官に下賜。
終了	皇帝、諸官、軍將は再拜 ↓皇帝 (殿中監に鎮圭を授ける)、諸官が退場 ↓有司は神主を納め、祝版を齋坊に燔す	終了	告官、諸官、諸將は再拜 ↓告官は望座位に就く ↓幣、胙肉、黍稷飯を埋める ↓告官、諸官、諸將は退場 ↓有司は神主を納め、祝版を齋宮に燔す

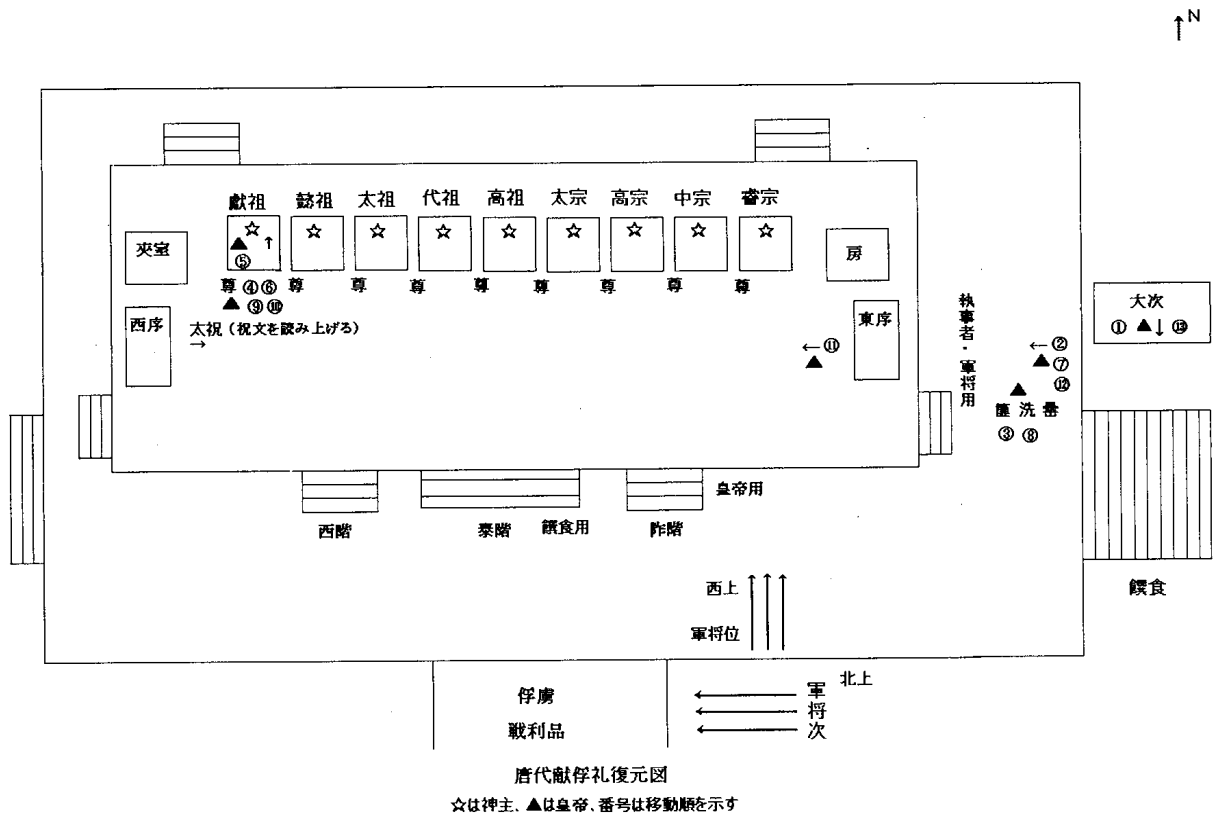


図1

を一つの爵に注ぎ合わせる。次に、侍中は福酒を皇帝に進める。皇帝は福酒を祭ってから、それを飲み（飲福）、床に置く。太祝は神主前に掲げられた胙肉と黍稷飯を籩に載せて、司徒がそれを皇帝に進める。皇帝はそれを食し、福酒を飲み干して、皇帝の行動は終了する。次に軍将が登場するが、彼らの行為は単純であり、皇考睿宗大聖真皇帝の室外で福酒を飲んで終わる。その後、百官と軍将たちは勅を受けて胙肉を食す。儀式が終了し、出席者が全員退場すると、有司は祝版を燃やすのである。

一方、大将「告」礼は、準備段階、奠玉帛、進熟、儀式終了の四段階を経る。準備段階は皇帝「造」礼とほぼ同じである。儀式会場では、まず告官が九廟に入り、幣をもつて九廟の神主に奉げる。続いて告官は九廟に醴齊を酌献し、その間に太祝が祝文を読み上げる。告官が東序に至ると、太祝は各室の尊から福酒を少しずつ汲んでそれを一つの爵に注ぎ合わせる。次に、告官は福酒を祭ってから、それを飲み（飲福）、床に置く。太祝が神主前にかけて胙肉を告官に進め、告官はそれを食し、福酒を飲み干して、告官の行動は終了する。次に、諸将が登場し、皇考睿宗大聖真皇帝の室外で福酒を祭ってから、それを飲み（飲福）、床に置く。また、諸将は胙肉を食し、福酒を飲み干す。続いて百官が勅を受けて胙肉を食す。以上の後、幣・胙肉・

表3

	太廟	祭祀内容	祭祀内容
吉 礼	皇帝時享於太廟 (卷三七)	①晨裸 ②饋食 ③祭七祀	①皇帝 ②皇帝、太尉、光祿卿 ③獻官
	時享於太廟有司攝事 (卷三八)	①晨裸 ②饋食 ③祭七祀	①太尉 ②太尉、太常卿、光祿卿 ③獻官
	皇帝禘享於太廟 (卷三九)	①晨裸 ②饋食 ③祭七祀	①皇帝 ②皇帝、太尉、光祿卿 ③獻官
	禘享於太廟有司攝事 (卷四〇)	①晨裸 ②饋食 ③祭七祀	①太尉 ②太尉、太常卿、光祿卿 ③獻官
	皇帝禘享於太廟 (卷四一)	①晨裸 ②饋食 ③祭七祀	①皇帝 ②皇帝、太尉、光祿卿 ③獻官
	禘享於太廟有司攝事 (卷四二)	①晨裸 ②饋食 ③祭七祀	①太尉 ②太尉、太常卿、光祿卿 ③獻官
	薦新於太廟 (卷五一)	薦新	太常卿
	季夏祭中霤於太廟 (卷五一)	祭中霤	太廟令
	皇帝巡狩告於太廟 (卷六〇)	①晨裸 ②饋食	①皇帝 ②皇帝
	巡狩告於太廟有司攝事 (卷六一)	①晨裸 ②饋食	①告官 ②告官
軍 礼	時早祈於太廟 (卷六五)	①奠玉帛 ②酌獻	①祈官 ②祈官
	皇帝親征造於太廟 (卷八三)	①晨裸 ②饋食	①皇帝 ②皇帝 (軍將飲福)
	制遣大將出征有司告於太廟 (卷八九)	①奠玉帛 ②進熟	①告官 ②告官 (軍將飲福)

黍稷飯を瘞に埋める。儀式が終了し、出席者が全員退場すると、有司は祝版を燃やすのである。

両儀式では太祝が祝文を読み上げるが、『開元礼』皇帝親征造於太廟(卷八三)の式次第には、祝文の内容について「祝文臨時撰、告以親征意」と記される。その具体的内容は毎回の実際状況によって異同があるが、基本的には親征の目的、戦争勝利の報告、俘馘などの状況が記されたと思われる。

ところで、両儀式には次の二つの差異が認められる。すなわち、①祭祀内容、②軍將の行動様式の相違、である。その違いを説明するには、『開元礼』に規定された太廟の諸儀式の内容を参照する必要がある。それらを整理すれば、表3のごとくである。

まず祭祀の内容を見てみよう。『開元礼』では太廟の告礼には通常は以下の方法があることが知られる。すなわち、(1) 晨裸、饋食、祭七祀¹⁷⁾、(2) 薦新、(3) 祭中霤¹⁸⁾、(4) 晨裸、饋食、(5) 奠玉帛、酌獻、(6) 奠玉帛、進熟、の六つの方法である。『新唐書』卷二二、礼楽志二に、「若宗廟、日饋食」とあることから、方法(1)は太廟に対する常態だと見てよいであろう。つまり、皇帝「造」礼は、「祭七祀」がない点と酌獻担当者の人数が変わる点以外は、基本的に吉礼の常態に従って実施されることにな

る。では、なぜ大将「告」礼では内容が「奠玉帛、酌献」に変わるのであるか。これは軍礼特有の性格に因んだ結果だと思われる。

軍礼が軍事権と政治権を総合したものととして特別に取り扱われていたことは献俘礼にも反映されている。前述したように、唐代祭祀系統の中では祭祀を大、中、小の三つのランクに分け、本文で取り上げた太廟で実施する献俘礼は大祀として位置づけられた。唐代では大祀の献官について、皇帝親祭の場合は、皇帝（初献）↓太尉（亜献）↓光祿卿（終献）であり、有司代行の場合は、太尉（初献）↓太常卿（亜献）↓光祿卿（終献）の三献の礼で、それぞれ神主に酒を奉げる⁽¹⁹⁾。その序列は、身分によって初献から低くなる⁽²⁰⁾。一方、『唐六典』巻四、尚書礼部、祠部郎中条に「諸小祀唯官一獻」とあり、小祀の場合は一献の礼を用いると規定している。しかし、太廟で実施する献俘礼は一献の礼で規定されており、これはほぼ同時期に完成した『唐六典』と合致しなくなる。表3の中で、三献をとらない儀式は、薦新於太廟（巻五一）、季夏祭中霽於太廟（巻五一）、時旱祈於太廟（巻六五）、皇帝巡狩告於太廟（巻六〇）、巡狩告於太廟有司攝事（巻六一）、皇帝親征造於太廟（巻八三）、制遣大將出征有司告於太廟（巻八九）である。この七儀礼のうち、前三者は小規模な儀式であり、三献の

代わりに一献の礼で告げることは容易に理解できるのであるが、なぜ吉礼の「巡狩告於太廟有司攝事（巻六一）」と軍礼の「皇帝親征造於太廟（巻八三）、制遣大將出征有司告於太廟（巻八九）」（献俘礼の実施方法はこれらと同様）は一献なのであるか。

『大唐六典』巻一六、衛尉宗正寺、武庫令条には、

凡大駕親征及大田、巡狩、以羝羊、豶猪、雄雞釁鼓。

とあり、また、同書巻一七、太僕寺、乘黃署条には、

凡乘輿五輅、……。一日玉輅、祭祀、納後則乘之。

……四日革輅、巡狩、臨兵事則乘之。

とある。この記事によれば、「巡狩」は軍礼の儀式と同じように、軍事活動と直接的に関係していることがうかがえる。そもそも献官の重要性について、江川氏は、「神とのやりとりを行うという点で、他の祭祀従事者とは異なる」と指摘した。また、金子氏も「特別な事件による祭祀において献官の注目度が高くて、政治的に利用された」と述べる⁽²¹⁾。

皇帝権力の基盤を支える中心的な柱は軍事権力であり、巡狩と献俘礼は皇帝権と軍事権とを総合した儀式として、皇帝は絶対的な唯一性を強調する必要がある。それには、最も有効な方法は通常実施する三献の礼を一献の礼に入れ替えることである。これと同様に、皇帝「造」礼と大きく

区別するために、大将「告」礼では皇帝が儀式中に実施する「晨裸と饋食」のかわりに、吉礼告礼で最も一般的な「奠玉帛と進熟」を用いたのであろう。

軍将の行動様式の相違については、皇帝（あるいは告官）が儀式中に晨裸（奠玉帛）、饋食（進熟）を行う間、軍将は傍観して無作為であるが、注意すべきなのは福酒と胙肉である。福酒はもともと酌献の時に用いられた醴齊⁽²²⁾で、晨裸と祝文の読み上げ（奠玉帛、酌献）を経るうちに、その中身は太廟の先祖霊の加護で福酒へと変化すると認識される。『旧唐書』卷四三、職官志二、侍中条に、
凡大祭祀、……洗爵、則酌鬯水以奉。及賛酌泛齊、進福酒以成其礼焉。

とあり、福酒の飲用は「礼を成す」を象徴する。つまり、福酒を「製造する」担当者の皇帝（皇帝の代理者の告官）は儀式の主導者でもある。皇帝「造」礼の中では、皇帝は胙肉を食してから福酒を飲み干すのに対して、軍将は皇帝が「製造した」福酒を飲み干さず、胙肉を百官とともに食す。これは、軍将は百官と同様に臣下の身分であることを表すものである。ところが、大将「告」礼の儀式になると、軍将は福酒を飲み干し、百官より先に胙肉を食べることになっている。つまり、大将「告」礼の儀式では、軍将は皇帝「造」礼よりも権限が増大しているのである。これ

は、軍将は皇帝から一部の軍事主導権を与えられたと認識されるからであって、したがって皇帝「造」礼と同様に一献の礼をとるのだと思われる。

四 皇帝に対する献俘礼

前述のように、太廟と太社の告礼を終えると、俘馘を皇帝が御する楼へ連行することが唐（特に後半期）では行われた。『開元礼』に該当規定のない儀式であるが、史料から抽出してある程度は復元が可能であるので、以下に掲げることにする。

A 大和三年（八二九）八月、太常禮院奏、謹按凱樂、鼓吹之歌曲也。……。謹檢『貞觀』、『顯慶』、『開元禮』書、並無儀注。今參酌今古、備其陳設及奏歌曲之儀如後。凡命將征討、有大功獻俘馘者、其日備神策兵衛於東門外、如獻俘常儀。其凱樂用鑣吹二部、笛、箏、篳篥、簫、箛、鐃、鼓、每色二人、歌工二十四人。樂工等乘馬執樂器、次第陳列、如鹵簿之式。鼓吹令丞前導、分行於兵馬俘馘之前。將入都門、鼓吹振作、迭奏『破陣樂』等四曲。……候行至太社及太廟門、工人下馬、陳列於門外。……。謹詳禮儀、則社廟之中、似合奏樂。伏以

尊嚴之地、饒吹嘩歡、既無明文、或乖肅敬。今請並於門外陳設、不奏歌曲。候告獻禮畢、複導引奏曲如儀。至皇帝所禦樓前兵伏旌門處二十步、樂工皆下馬徐行前進。兵部尚書介冑執鉞、於旌門內中路前導。……次協律郎二人、公服執麾、亦於門下分導。鼓吹令丞引樂工等至位立定。太常卿於樂工之前跪、具官臣某奏事、請奏凱樂。協律郎舉麾、鼓吹大振作、遍奏『破陣樂』等四曲。樂闋、協律郎偃、太常卿又跪奏凱樂畢。兵部尚書、太常卿退、樂工等並出旌門外訖、然後引俘馘入獻及稱賀如別儀。別有獻俘馘儀注。俟俘囚引出方退。請宣付當司、編入新禮、仍令樂工教習。依奏。

〔旧唐書〕卷二八、音樂志一

B (元和)十二年(八一七)十一月、隋唐節度使李愬、平淮西、擒逆賊吳元濟以獻。上禦興安門、大陳甲士旌旗於樓南。文武群臣・皇親・諸幕使人、皆列位。元濟既獻於太廟太社、露布引之、令武士執曳樓南。攝刑部尚書王播奏、請付所司。制曰「可」。大理卿受之以出、斬於子城之西南隅。〔唐會要〕卷一四、獻俘)

C (元和)十四年(八一九)二月、魏博節度使田宏正奏、「今月九日、淄青兵馬使劉悟、斬逆賊李師道、並男二人首級、請降」。上禦興安門受田宏正所獻賊俘、群臣稱賀於樓下。授劉悟義成軍節度使、封彭城郡王李師道

唐代軍礼における「獻俘礼」の基本構造

妻魏氏並女、沒入掖庭。堂弟師和、配流嶺表。

〔唐會要〕卷一四、獻俘)

A、B、Cの記事はそれぞれ互いに時代が近い憲宗朝と文宗朝のもので、記載も比較的詳細である。内容を整理すると、以下のとおりである。

①大功があつて俘馘の奉獻を命じられた者(大功獻俘馘者)は、東門(春明門)の神策軍と合流して俘馘を神策軍に渡す⁽²³⁾②鼓吹令、丞、歌工二四人、樂工(乘馬)は神策軍、獻俘馘者、俘馘を前導して東門に進む③東門に入ると破陣樂、鼓吹を奏する④太社(太廟)の門外に着くと、音楽を停止して樂工は下馬し、全員がそれぞれに位に就き、俘馘を並べる⑤告礼を終え、音楽演奏⑥皇帝が御する樓の旌門前に就くと、兵部尚書が前導にして中路に入場し、位に就く(百官・皇室・使者全員が位に就く)⑦太常卿は跪いて凱旋の樂の演奏を上奏し、「破陣樂」を奏する⑧音楽が終了すると、兵部尚書・太常卿は退き、樂工も退場⑨俘馘が露布の引導で入場⑩刑部尚書が俘虜の処分を大理寺に交付するよう上奏⑪皇帝から「可」の勅が出され、大理寺卿は俘虜を受けて行刑に出発⑫百官が樓上の皇帝に対して祝賀⑬投降した者に官位を授与。

注目すべきは、獻俘儀礼の執行日に儀式の行列は長安城

東門の春明門から入城することである。というのも、長安の皇城では太社は太廟の西に位置し、つまり、春明門から入ると太廟を通してから太社に到着することになるからである。そうすると、むしろ太廟↓太社の順で告礼を行う方が手順としては現実的だと思われる。おそらくはこの影響かと思われるが、唐代献俘礼の實際例では「太社↓太廟」より「太廟↓太社」の順の方が圧倒的に多く見えるのであり、さらには太社を避けて「太廟↓皇帝の御する樓」という例も実は多いのである。

むすび

本稿で述べたことを要約すると、次のとおりである。

- (1) 唐代の軍礼における献俘礼は、「皇帝親征」と「制遣大將出征」の二つの場合に分かれ、いずれも主として太社と太廟に対する儀礼であり、皇帝親征では「造」礼が、大將出征では「告」礼が行われる。
- (2) 献俘礼の实例を唐代の史料に見ると、太社・太廟以外に、皇帝が樓に御して、そこに俘虜が連行され、処分が下される儀式が行われた。しかし、それは『開元礼』には規定されておらず、国家の正式な献俘礼はあくまでも太社・太廟での儀式である。

- (3) そこで、太廟における献俘礼の式次第を見ると、皇帝「造」礼では晨裸・饋食が、大將「告」礼では奠玉帛・進熟が儀式の中心となる。儀式で三献の礼ではなく一献の礼を行うことは、献俘礼が二大権力を融合した儀式であり、特別に取り扱われたためと思われる。また、大將「告」礼では皇帝「造」礼に比べて、將軍の行為からもその権限の増大が読み取れる。

- (4) 一方、皇帝本人に対する献俘礼は、俘虜の取り扱いや祝賀など視覚的効果を狙った現実的な性格が強い。儀式の行列は春明門から入城し、地理的な関係から太廟の告礼とセットになる傾向を示す。

すなわち唐代の献俘礼には、社稷や祖先靈に告するいわば「対神」的儀礼と、皇帝の軍事権力を象徴する「対人」的儀礼とが存在し、『開元礼』に規定されるのは前者の「対神」的儀礼である。しかし、実際には皇帝親征よりも大將出征のケースがはるかに多かったのであるから、「対人」的儀礼の意義が高まり、しかも対神的儀礼では俘虜に対する処分が下されないことから、その傾向がさらに強まったと思われる。事実、皇帝本人に対する献俘礼は唐後半期になると史料に頻出し、その式次第ともいべき記述さえ認められる。とすれば、それが後世の軍礼に影響を与えたことが予想され、ここに宋代の献俘礼と比較するため

の具体的な視座が得られるのである。

本稿は、そのための予備的考察である。

註

- (1) 唐宋軍礼に関する研究は、以下の三類に分けられる。一は、陳戍国『中国礼制史・隋唐五代卷』（湖南教育出版社、一九九五年）、楊志剛『中国礼儀制度研究』（華東師範大学出版社、二〇〇一年）、任爽『中国礼制史』（東北師範大学、一九九九年）などで軍礼全般を論じた通史的な研究であり、内容は各儀式を深く掘り下げてはいない。二は、丸橋充拓①「魏晋南北朝隋唐時代における「軍礼」確立過程の概観」（『社会文化論集』七、二〇一一年）、王美華「唐宋礼制研究」（東北師範大学博士論文、二〇〇四年）であり、時代を限定して軍礼全体をとらえようとする研究である。三は、丸橋充拓②「唐宋变革期の軍礼と秩序」（『東洋史研究』六四、三、二〇〇五年）であり、軍礼の一部の講武と狩獵を分析対象とした研究である。
 - (2) 唐代には、戦争が終了する段階で行われる諸儀式として、本文で取り上げる献俘礼のほか、宣露布、遣使勞軍、策勳、飲至などもあった。
 - (3) 郭旭東「甲骨卜辞所見の商代献捷献俘礼」（『史学集刊』三、二〇〇九年）、高智群「献俘礼研究」上・下（『文史』三五・三六、一九九二年）参照。
 - (4) 本文で取り上げる『開元礼』は汲古書院刊、東京大学東
唐代軍礼における「献俘礼」の基本構造
- 洋文化研究所所藏洪氏刊本の影印本を使用。句読点は筆者が付した。
- (5) 『開元礼』軍礼篇卷八一（八九参照）。
 - (6) 献俘礼は内容が告礼に属しており、その流れと出征する前の儀式とが一致していることから、これらの名称も一致していると思われる。
 - (7) 「類」は軍礼では皇帝が圓丘で昊天上帝に対する告礼であり、その内容は『開元礼』卷八一「皇帝親征類於上帝」に詳細に記される。
 - (8) 魏晋南北朝の軍礼について、前掲註（1）丸橋氏論文①を参照。
 - (9) 『新唐書』卷二二五下、突厥伝下。
 - (10) 穴沢彰子「唐代皇帝生誕節の場についての一考察―門楼から寺院へ―」（『都市文化研究』三、二〇〇四年）を参照。
 - (11) 妹尾達彦「唐長安城の儀礼空間―皇帝儀礼の舞台を中心に―」（『東洋文化』七二、一九九二年）。
 - (12) 『旧唐書』卷一〇、肅宗本紀。
 - (13) 近年、『開元礼』の儀式過程を分析した考察は多くある。たとえば、前掲註（1）の丸橋論文（軍礼）、石見清裕①『唐の北方問題と国際秩序』（汲古書院、一九九八年）（賓礼）、②「唐代凶礼の構造―「大唐開元礼」官僚喪葬儀礼を中心に―」（福井文雅博士古稀記念論集『アジア文化の思想と儀礼』春秋社、二〇〇五年）（凶礼）。吉礼については西岡市祐①「卜日・齋戒・陳設儀礼の差異―時享儀礼の

比較」(『国学院中国学会報』四五、一九九二年)、②「省牲器・晨裸儀礼の差異―時享儀礼の比較―」(『国学院雑誌』一〇〇、一九九九年)、③「鑿駕の構成―「天宝元年二月甲午、親享太廟」の解説」(『国学院大学紀要』三七、一九九九年)、④「唐代「薦新于太廟」の儀礼復原」(『国学院雑誌』九七、一九九六年)など。

(14) 『開元礼』卷一、序例上に、「凡国有大祀、中祀、小祀。昊天上帝、五方上帝、皇地祇、神州、宗廟、皆為大祀。日、月、星辰、社稷、先代帝王、嶽、鎮、海、瀆、帝社、先蠶、孔宣父、齊太公、諸太子廟、並為中祀。司中、司命、風師、雨師、靈星、山林、川澤、五龍祠等、並為小祀。州縣社稷・釋奠及諸神祀、並同為小祀」とある。

(15) 表2「皇帝親征造於太廟」の段落区分は『開元礼』に従った。「制遣大將出征有司告於太廟」は記述が簡略で、原文では段落区分も省略されているが、その内容は吉礼諸儀式の「奠玉帛」と「進熟」と一致しているので、それにしたがって区分を加えた。

(16) 本図は註(13)の④西岡氏の「唐太廟想定図」を参考に作成。

(17) 『礼記』祭法に、「王為群姓立七祀。曰司命、曰中溜、曰國門、曰國行、曰泰厲、曰戶、曰灶。王自為立七祀」とある。

(18) 『礼記』郊特性に「家主中霤而國主社」とあり、孔穎達は「中霤謂土神」と注する。

(19) 『唐六典』卷四、尚書礼部、祠部郎中条。

(20) 江川式部「唐朝祭祀における三献」(『駿台史学』一九、二〇〇六年)参照。

(21) 金子修一「中国古代皇帝祭祀の研究」第一部第三章、(岩波書店、二〇〇六年)。

(22) 醴齊は祭祀用の酒で五齊の一つである。『周礼』天官に、「辨五齊之名、一曰泛齊、二曰醴齊、三曰盎齊、四曰緹齊、五曰沈齊」とある。江川式部「唐朝祭祀における五齊三酒」(『文学研究論集』一四、明治大学文学研究科、二〇〇一年)、同「唐朝祭祀における玄酒と明水―『大唐開元礼』の記載とその背景―」(『駿台史学』一一三、二〇〇一年)参照。

(23) 『大唐六典』卷七、尚書工部に、「京城……東面三門、中曰春明、北曰通化、南曰廷興」とあり、三門のうち、春明門から入城すると東西大通りがあり、途中に太廟と太社を通る。そこで、史料にいう東門とはこの門を指す可能性が最も高いと思われる。さらに、この門を利用すれば賑やかな東市をも通り、三門の中で最も理想的である。